

# こすって町の痕跡

## 工場・商店跡 色鉛筆で紙に

南千住の商店主ら企画、1万枚目標

凹凸面に紙を置き、色鉛筆などでこすって図柄を写し取る「フロッターージュ」という技法で、工場や商店などの痕跡を残す「町の記憶プロジェクト」が13日、荒川区南千住で始まった。商店街の若手らが美術家と連携して企画。子どもたちをはじめ地域ぐるみで、2年かけて1万枚の「記憶づくり」を目指す。  
(黒川和久)

### まず小学生挑戦

南千住はかつて町工場や商人のまちとして知られたが、再開発が進み、その面影を失いつつある。一方でマンション建設が相次ぎ、区内では51年ぶりに新設小学校が開校するなど新住民も増えている。企画したのは若手商店主や会社員、主婦らでつくる「南住すみだ川」(NPO法人申請中)。新旧住民が地域の歴史を共有したり、失われつつある「記憶」を残したりしながら、まちを考えるきっかけをつくるのが狙いだ。美術家は東京工科大の酒百宏一准教授で、中心メンバーで理容室を営む海老江重光さ



工場の床の図柄を色鉛筆でこすり取る子どもたち＝荒川区南千住7丁目

ん(39)が、酒百さんのフロッターージュアートを見て協力を依頼すると、快諾してくれた。南千住にゆかりのある日本大昭和板紙が趣旨に賛同し、画用紙を提供している。プロジェクト初日となった13日は、百年以上の歴史があり、近く取り壊される工場を、地元の区立第三瑞光小学校の5年生ら約70人が訪問した。酒百さんの助言を受けながら、床に残る機械を固定していた跡や、枕木などに画用紙をあて、思い思いの色鉛筆でこすり取っていた。

床の凹凸を緑や水色で採取した川崎凌君(10)は「振動が手に伝わってきた。傑作ができた」。同工場で42年間働き、案内役を務めた湯本敏雄さん(60)は「一つひとつに愛情があり、生きてきた証し。取り壊して寂しい思いがあったが、少しでも記録に残せて感無量です」。

同小の子どもたちはコッ通り商店街のそばや酒屋なども訪れ、店主らの話を聞きながら「記憶」を採取した。計画では町工場や橋、街道など10のテーマに分けて製作し、作品は随時展示もしていく。地元の住民を中心にだれでも参加可で、海老江さんは「多くの人に参加してほしい」と呼び掛ける。問い合わせは千住すみだ川(03・3801・3428)へ。

朝日新聞(東京東部)  
2010年7月14日(水)  
東京川の手面(35面)